令和５年度　第３回仙台市学校給食運営審議会分科会会議録

1　**日時**　令和６年３月１９日（火）
１８時０５分開会
１８時５５分閉会

2　**場所**　仙台市役所本庁舎８階　第１委員会室

3　**出席委員**　丹野久美子委員、成田栄子委員、中村晴美委員、阿部英男委員、安藤香委員

4　**事務局職員**　渋谷総務企画部長、加藤健康教育課長、大堀給食管理係長、丸山給食事業係長、近藤給食事業係指導主事、佐々木給食事業係主査、豊島給食事業係主査

5　**説明員**　丸山給食事業係長

6　**定足数の確認**　議事に先立ち、事務局より、本日の出席者が５名であり「令和５年度仙台市学校給食運営審議会分科会の運営について」に定める定足数を満たしているので、本会議は成立している旨報告がなされた。

7　**議事「現在までの経緯を踏まえた給食施設のあり方の方向性について（前半）」**

会長　議事「現在までの経緯を踏まえた給食施設のあり方の方向性について」事務局から説明願う。

事務局　（資料１頁から３頁まで説明）

会長　前回の分科会において「本市の学校給食が、なぜ単独調理校方式と給食センター方式に分かれているのか」との質問があり、事務局で丁寧にまとめていただいた。相当なご苦労があったかと思うが、このように整理していただくと、仙台市の合併等の事情などにより、このような状況になってきたということに納得できた。
ここまでの事務局の説明について、ご意見・ご質問は何かあるか。
（一同　意見・質問なし）

8　**議事「現在までの経緯を踏まえた給食施設のあり方の方向性について（後半）」**

事務局　（資料４頁から７頁まで説明）

会長　事務局より、対応すべき様々な課題と、今後の方向性の案をお示しいただいた。皆様のお立場からご質問やご意見はあるか。

中村委員　今まで知らなかったことが多く、非常にためになった。今後の方向性についてはこれから検討していくものだと思うが、ICT を活用したオンラインでの食育指導の可能性を検討する材料として、例えば、他市町村の事例があれば紹介いただきたい。また、そのようなことを実施する場合に、学校現場でのハード面もしくは学校教員の技術面のヒントがあれば教えていただきたい。

事務局　ICT を活用した食育指導について、群馬県教育委員会では、WEB の会議システムを活用し、児童は教室に居たまま、給食センター側が配信をし、給食センター内の見学や、児童の質問にその場で調理員が答える等の取組みをしているようである。本市では、親子方式の生出小学校と生出中学校において、給食の献立や写真を各クラスのディスプレイに表示して、それらを担任の先生方に紹介してもらうという取組みを行っている。また、月に１回程度、親校と一緒にオンラインでの食育の指導も行っている。
オンラインでの食育指導を導入する上での課題や環境面の整備としては、各施設を繋ぐ通信環境の整備、それによる教職員の負担を検討しなければならないと考える。例えば、動画や資料等を子校に送信するだけであれば、現状でも対応できるのではないかと思うが、先程申したようなオンラインで食育指導を行う場合には、少

し整理が必要ではないかと考えている。この辺りは、担当部署と情報共有を図りながら進める必要があるものと認識している。

中村委員　今の話からすると、今後できることもあるかもしれないと思った。

成田委員　いただいた資料により歴史を遡っていくと、その時々の社会情勢や様々な実情を踏まえて考えられてきたのだとよく理解できた。そのため、現在の社会情勢にも合った考え方を私たちもしていかないといけないと思うのだが、前回話した調理パート職員の不足はとても大きな問題だと認識しており、安心安全な給食の持続的な提供を考える時には、人材不足の課題は外せない問題だと思う。

そうなると、提案にあった親子方式、それが難しければ給食センターへの移行になるべきと考えている。ただし、親子方式は、本当に実現可能性があるのか、親校と子校のマッチングができるのか、といったところは相当難しいのではないかと思った。親子方式について、どの程度可能であるのか。

会長　事務局はいかがであるか。例えば、親子方式に切り替わったところは、人員や設備の手配はあったか。

事務局　まず、親子方式を実施するに当たっては、親校の設備面や子校の児童生徒数相当分の食数を調理する能力を備えていなければならない。他にも、親校・子校の配送距離の整理も今後進めていく必要があると考える。また、会長からお話のあった人員面は、人員配置基準に則って人員を配置した上で、さらに個別の事情に応じて追加で給食パート職員を配置している状況でもあることから、仮に、親子方式に移行となった場合、親校となる学校は一定程度負担が増すものと考えているため、人員配置の工夫が必要と考えている。

阿部委員　資料を確認すると、単独調理校と給食センターの各々のメリット・デメリットや個々の違いがある。保護者の立場としては、保護者が納得することが大事であり、「単独調理校がおいしい」「給食センターがおいしくない」といったことではなく「自分の子どもが平等にサービスを受けている」という意識を持ってもらうことがとても大切だと思っている。

前回、なぜ平等でないと思われるような単独調理校方式と給食センター方式になってしまったのかが疑問であったが、今回の説明を聞くと、合併等もあったため、これは仕方なかったと思っている。また、単独調理校と給食センターの丁度よい性質を持つ親子方式を上手く活用すれば、望ましい方向に落ち着くのではないかと考えている。

ただし、親子方式を増やしていくという方向性はよいが、実施するに当たっては各種の細かい取り決めが必要になってくると思う。これをまた皆で話し合って、まず実施した上で不具合があれば修正していくということを何回も繰り返して、完成させていけばよいのではないかと思う。どの学校を組み合わせるのかといったことや人員的な調整は専門の人に聞かないと私では分からないが、保護者の立場からすれば、このような方向性を打ち出せることは説得力があるのではないかと思う。

会長　確かに、仕組みが変わっていく上では、保護者の理解・納得を得ることは非常に重要なポイントとなる。教育やサービスの機会が平等であるということを理解していただかなければならないので、丁寧に進めていくべきだと思う。

資料中の対応すべき課題として「給食施設の老朽化」「児童生徒数の減少」があり、阿部委員がおっしゃったように、段々と給食調理員も少なくなっていく中で、親子方式のような方向に進むのだろうと委員の皆様は考えていると思うが、例えば「どのような基準であれば、親子方式に移行するのか」という、ある程度の見通しがほしい。おそらく、地区として同時に児童生徒数が減っていくと思うので、小学校と中学校が親子方式になるところも増えていくのではないかと想像する。事務局では、その辺りの見通しやシミュレーション等を検討したことがあるか。

事務局　どの学校を親校・子校にするという話は、調理能力や学校間の距離を鑑みなければならないと大まかには考えているが、具体にどことどこの学校にするのか、何年度に親子方式にするのかなどのシミュレーションまでには現時点では至っていないところである。

安藤委員　１年前までは、一保護者として、子どもから「給食おいしかった」などと聞くだけだったが、給食１つでこんなにも様々な問題があり、安定的な提供のためにこんなにも苦労があるということを学ばせてもらった。

私のいる南中山中学校は500世帯以上あるが、私１人でこの情報を持っているのがもったいないぐらい色々なことを知ることができたので、今後、どのような実施方式を採るにしても、各実施方式のメリット・デメリットや、どのような問題を抱えているのかといったこと、また「単独調理校の給食は温かくておいしい」というイメージがあるが、実は給食センターでも同じように温かい給食が提供されているということなど、保護者が知らない情報を是非とも発信してほしい。どのような実施方式になったとしても「採用した方式には、お子さんにとってこのようなメリットがある」といった説明がきちんとあれば、阿部委員からの話にもあったが、保護者の理解を得られると思うので、この場で出た情報は保護者にも届けてほしい。

会長　私の栄養士の立場からすると、食育や給食メニューとして家庭向けの情報提供をしているつもりであるが、直接保護者の皆様に会って話をする機会はなく、単独調理校であれば単独調理校、給食センターであれば給食センターの情報しか伝わらないというところが、保護者の皆様は少し損をしていると思ってしまう。確かに、このような情報も保護者が手に入れられるような仕組みや機会が必要かもしれない。

今回の資料について、事務局の方にかなり丁寧に作成していただき、とても感激した。このようなことは校長先生も栄養士もなかなか知らないと思うし、苦労しながら色々な資料を探されたそうである。折角なので、より多くの方々や先生方に、このような情報を知っていただくとよいのではと思った。

成田委員　私もこの資料を見た時に感激した。調べるのにどれだけ多くの時間を要したのかと思ったが、このように分かりやすくまとめていただいたのは、今後にも活かせる貴重な資料になると思うし、皆でこのような情報を分かっていると、よいことが沢山あるのではないかと思った。これからのよりよい給食提供に役立てられるのではないかと考えている。

会長　給食は児童生徒のために提供されているものなので、安心安全という面であるとか、教育者の立場からすると食育や教育的な観点もある。校長先生からすると管理者としての難しい面があるとか、保護者対応があるといったことが考えられるが、何か不安なことや確認しておきたいことはないか。

中村委員　この会を重ねれば重ねる程、平等であると思うようになった。栄養面、アレルギー対応について私は最初の頃に質問していたが、どの実施方式を採ったとしても、個々への対応について非常に丁寧にできるシステムが成り立っていると思う。そのため、今はどの実施方式になったとしても、自分が保護者の立場であれば、きちんと説明をすれば大丈夫ではないかと思う。

管理者として不安なこととしては、どうしても保護者は何かを変える時には不安に思われたり、今までと違うことに対して抵抗のある方も多いので、もし自校であるならば、学校はそこをいかに説明するのかという説明の仕方が不安ではある。

会長　管理者の立場からの話を伺ったが、保護者の立場からは「もっとこういう風に考えてほしい」「この点はどうなのか」というところはないか。

阿部委員　PTAの立場から言うと、給食の件に限らず、昔の保護者は「こうですよ」と話しをすれば「分かりました」と答えていたが、今の保護者からは、大体「なぜ？」と問われる。「なぜ、そのようになったか」を必ず聞かれる保護者がおり、そのことについて説明できないと、悪い方へ悪い方へ流れていってしまう。

そのため、今回の件にしても、きちんと説明をした上で「このように変えます」と示さないと、後々「なぜ？」という意見が必ず出てきてしまい、その１人を放置してしまうと、２人、10人、20人、50人…と増えていく流れになってしまう。

最初にシステムを変更する時は、なるべく理由を説明し、転ばぬ先の杖として、できる限り保護者の疑問を想定しながら物事を進めた方が上手くいくと思う。

安藤委員　全く同じ意見であり、保護者からは、何かを変えようとすると「なぜ？」という質問は必ず出てくる。最終的に「子どもにとってどうなのか」を念頭に置き「子どもたちに栄養バランスのとれたおいしい給食を届けるため、これだけの問題がある

中、少しでも良い方に進んでいくために現在の内容を変えていきたい」という話であれば、納得いただけると思う。その部分を省略せずに、丁寧に対応していただけるとよいかと思う。

会長　何か変えるとなると、確かに、多くの方が現状維持をしたがる傾向があり、効率化が図られて自分たちが受け取るものが少なくなるというような印象を持ちがちである。そのため、むしろ、こうした方がサービスが良くなるという印象を与えられるよう、また、実際そうなるような仕組みを考えていくべきだと思う。

また同時に、子どもの数も働き手の数も減る中、給食の観点からは様々なアレルギーや疾患の対応があり、猛暑や戦争による食品の高騰も生じている。加えて、古い厨房では冷房がなく、学生もＴシャツを何枚も着替えながら対応している状況であるため、働き手や管理者の環境改善を考えていかないと、持続しない仕組みになってしまう。

この分科会では、まだ結論には達していないが、多様な立場からご意見いただきながら、よりよい方向に進んでいくとともに、特に保護者の方々にご理解いただいた上で、学校の先生方の負担が急に増すようなことにはならない仕組み作りを目指していきたい。今回の資料は貴重なものであるため、事務局では、もっと多くの方の目に触れるよう、活用していただきたい。

会長　以上により、議事を終了したい。

事務局　それでは、今後の予定について、説明申し上げる。

次回の分科会については、本日頂戴したご意見を踏まえながら内容をまとめさせていただき、新年度の８月頃を目途に、多くの委員の皆様にご参加いただけるよう開催時期を調整してまいりたい。引き続き、学校給食の充実のため、ご指導をお願いしたい。

以上により、令和５年度第３回学校給食運営審議会分科会を閉会する。

以上

令和６年　5　月　20　日

署名委員　　仙台市学校給食運営審議会分科会会長

丹野久美子

仙台市学校給食運営審議会分科会委員

阿部英男